

ハワイ寮の親分・ヤング先生 を偲んで

蔭 山 淳

(アメリカ寿電子工業社長)

始めて先生にお目にかかったのは、一九四七年四月、戦後再開されて間もないハワイ寮においてでした。学校当局より、新しい宣教師が舎監として赴任して来られるとの通告を受け、窓に額を押しつけて今かくと好奇心と不安にかられて待っていました。そこへ、赤い羽根のついた帽子をかぶり、鼻歌を唄い乍ら、私達を無視した素振りが入つてこられました。四十五歳の誕生日を迎えたばかりで油の乗りきつたお年でした。以来八十八歳で召されるまで、四十三年の長いおつき合いをさせて頂いたことになりました。

私は戦後二代目の寮長として寮の運営のお手伝いをしたことに加え、当時の苦学生の場合にもれず胸を痛み、三年間の療養を余儀なくされました。この間ずっと栄養食を差し入れ、定期的訪問の折には「ヨブ記」を読んで励まし続けて下さったこともあり、先生には特別の恩義を受けました。が先生と共に青春とハワイ寮で過した殆んどOB達が同じ様に先生を慕い、尊敬し続けてきたのは何故だったのでしょうか。

先生は勝ち気で、わがまま、喜怒哀楽、好き嫌いがはっきりしていました。私共の宣教

師像からは程遠い、型破りの先生でしたが、自分を偽らず、弱点をかくさず、ありのままに私共に接し、体を張って何が正しいかを教え、人助けを天職として実行され、真のキリスト愛の実践者でした。御自身、この世のものは何も持っておられませんでしたが、人助けに必要な財にしろ、物質にしろ米国の教会や友人に義捐を求められ、その懇願の仕方は相手に臨場感を与える迫力に満ちたものでした。その御努力にみんな感心していました。加えて、寮生の多くが先生を通して「神を知った」こと等々がその理由だったと思います。

先生と寮OBの関係はずっと続きました。そして誰言うともなく、先生を日本に招こうと言うことになり、先生の足腰に衰えのみえる様になるまで五度お招きしました。先生の訪日時、OBの楽しみは新しい家族を先生に引き合わせることで、先生もそれを心待ちしておられました。毒舌の先生で、何時も「R」と「L」の区別の出来ない〇〇とか、田舎者の〇〇とか、ぼろくそにけなされていた私共でしたが、家族の前では亭主としてほめ、花を持たせて下さったことなども、先生の日本招待を持続させた因だったかも知れません。



● John G. Young 氏略歴 ●

- 1902年 4月1日生
1924年 マサチューセッツ州スプリングフィールド
YMCA 大学卒業
1924年～1928年 ホノルル市のスアス YMCA の主事を
つとめ日系、中国系及び韓国系の青年達の教育
活動を推進。
1939年 コロンビア大学、ユニオン神学校から M. A. の
学位を受く
1947年～1967年 同志社大学神学部教授、ハワイ寮舎監
をつとめた。
1986年 勲四等瑞宝章受章
1990年 7月30日23時(米国時間) 永眠 88歳

この様な関係を通して、師弟以上の感情が芽生えていったのでしょうか。何時の頃からか、先生を「親分」と呼び、よそ行きには「Uncle John」と言う様になりました。

先生の健康状態が思わしくなくなり始めた一九八五年、ロス在住の松田兄の提唱で叙勲の準備を始めました。その際多くのOBが奔走してくれたのも、両者のきずなの強さを物語っていると言えるでしょう。先生は勲四等瑞宝章を受けられました。

私は八五年以来、松下寿電子工業の米国工場を経営に携わり、二〇〇名を越える現地の人達と一緒に仕事をしています。当然のこと乍ら、異文化コミュニケーションにしろ、地域社会との融合にしろ、アメリカの特有の問題があつて苦労が多いですが、ヤング先生に鍛えられ、薰陶を受けたお蔭で地元から喜ばれ、近隣の大学からも度々お招きを受ける仕事を頂いています。こんなことが評価されたのでしょうか、昨秋「World Affairs Council of Oregon」より日本人として始めて表彰の栄に浴しました。先生に喜んで頂けなかったのは残念でしたが、幾分かの御恩返しが出来たのだと思つています。

私共が最後まで先生との御縁を保つことが出来たのは、松田誠朗兄の尽力に負うところ大でした。彼は Hughes Aircraft の 監査役の要職にあり乍ら、先生に会いたいという人は誰彼となく自ら運転して、遠いクレアモントまで運んでくれましたし、晩年の先生を实子の如くよく看病し尽くしてくれました。従つてヤング先生は他のどの先生よりも多くの同志社人にお会い頂いた幸せな方でした。松田兄の献身と、御家族の深い御理解に心から感謝申し上げます。

新島襄の「資料」と「信仰」 を追った人

——森中章光先生——

保 邦 武

(女子大学教授)

一八九四年(明治二十七年)年といえは、あと三年加えると百年前ということになるが、「新島襄」研究の開拓者、森中章光先生が生れている(二月二十日)。出生地は山口県阿武郡阿東町生雲(津和野から約二十キロ南西、黒獅子山の麓、生雲川の岸)である。

そして昨年四月一四日、九十六歳三カ月の長い闘いの生涯を終えた。新島を慕い、彼の信仰に続かんとした一人の人生は、真にその本人が新島の生涯を指して言われた如く、「見えざる聖手のお導き」によるものであられた。かつてこれ程までに熱情を傾けて「新島先生」に関するあらゆる記録(歴史文書)を後世に(特に同志社のために)残そうとして努力した先達が外にいるだろうか。懸命に家族を養い和した壮年期に「校友会」で働きながら、細かな批評はともかくとして、世に同志社の新島襄を注目された業績(例えば、「新島襄書簡集」、同(統)特にこれに付された「詳年譜」)は今日のソフト器械を使って作成される正確さだけのものなどよりも貴重である。それは人間の手になる美しき芸術である。さて、特徴的なその人生の一駒を若干の感想を込めて記すことを許されたい、——い

れ伝記が一校友によりなされるであろう。森中章光先生には五回の転機があったと思

う。

第一は、同志社普通学校入学(一九〇八年)である。これは広島県の修道中学からの編入であった。波多野培根(波多野)教頭への紹介状をもって来た少年は、その時彰栄館の一室で波多野から試験を受けさせてもらった。晩年その記憶を鮮明に語ってくれた。同志社との出会いの日であった。一年生終了時、晴れてこの学校教会で洗礼を受けた(一九〇九年六月二十七日、原田助牧師)。彼は第一番の新島の孫弟子であるだろう。それゆえか風貌も、直弟子で活躍した人々の様に似ていた。

卒業(一九一三年)後、大学の神学部へ進学、しかし第一次大戦前夜、軍に入隊し退学する。後年(第二次大戦後)、長い間教会から離れていたのは、日曜日の新島関係「家蔵文書」探しに歩いておられたことと、この時の神学部同期生たちとの別れもあったであろう。

第二は、軍より戻り、横浜、門司と市役所の民生福祉関係の従事した後、九州の鉱山会社でヤマの生活をした頃から始まる。三十歳



●森中章光氏略歴●

- 1894年 1月20日生
1932年 3月 同志社専門学校英語師範部卒業
1932年 横浜市役所勤労課勤務
1935年 門司市役所社会課勤務
1938年 筑豊炭鉱で社会福祉事業に従事
1952年～1959年
同志社総長事務室勤務
同志社新島研究会副会長
1986年11月29日同志社大学名誉文化博士学位を受く
1990年 4月14日12時55分永眠 96歳

代に入った。徳富蘇峰との係わりがこの頃あったのだろうが、蘇峰の「新島襄先生顕彰」の願いと、森中先生の思いが一致したのは今少し後であったかもしれない。九州から再び同志社（同志社教会）の門をたたいた（一九二六年）、生活のこともあつたらうが、神学部、経済学部の聴講生となる。その後、専門学校英語師範部に入学する。周囲の期待もあり、自分で生涯新島の関係文書の解読者になるにはもつと英語の修得を加えなければ、と決心された。妻子のある三十歳後半の学生に年若い上野直蔵（後の総長）が教えた。それは夜間部の授業であつた。

第三は、一九四五年（終戦）の時からのこと。その六月に愛する一人息子・祥光の戦死。十一月に恩師・勝山波多野の逝去。悲しみと虚ろさを耐えて翌年三月より滋賀県石山寺の奥の山（大石村）に入る。そこで労作教育道場ともいえる「新民法」を結社して青年たちと生活した。改革者のような気分だったと言われたが、何か幽玄の世界に遊ばれたようにも思えた。そこで息子や恩師と出会つておられたにちがいない。聖書（特に「ローマ人への手紙」）を愛読する。新島を知るに必要な聖

書を体験した。

第四は山から京都へ戻り、校友会を通して本格的に資料の蒐集と研究に励まれた一九五〇年以後。翌年「同志社」は学校法人として誕生し、教職員からも理事らに選出される道が開かれた。その変容（大塚節治総長時代）に関係があつたのか、同志社教会（一九二六年転入、海老名総長時代）から西陣教会へ転籍された（一九五二年）。しかし内に燃えた思いは開華して、『新島研究』なる雑誌の発行と「同志社新島研究会」の結成を大半自力でなした。（五四年）。

この時から一九九〇年四月十四日正午までの三六六年間が第五期である。妻の病と死を看取り、三年を過ぎ東京ホーリネス教会に連なる現牟良夫人と再婚（一九六六年）。二十四年間の協力体制は真にはために麗わしく、強力で心底より希求された「新島襄全集」（全十巻・現在刊行中）の出版に最大の貢献をなした。晩年の生活は、三年近く同志社教会（一九八六年転入）の聖日礼拝を峻厳に守られ、時に新島襄を語る説教奉仕、愛好の読書の外、実存をかけて新島の後を慕い続けた。